

保健医療分野で看護補助アルバイトを行う看護学生の体験と キャリア形成への影響

久保幸代* 柚山香世子** 高橋道明*

* 亀田医療大学看護学部看護学科 ** 城西国際大学看護学部看護学科

Experiences of Nursing Students who Do Part-time Work as Nurse Aides in the Field of Health Care

Sachiyo Kubo* Kayoko Yuyama** Michiaki Takahashi*

* Kameda College of Health Sciences ** Josai International University

〈要旨〉

看護補助アルバイトを行う看護学生が、アルバイトを通してどのような体験をしているかを明らかにすることを目的とし、学生7名を対象にグループインタビューを行った。

体験から、テーマ1. 看護に関する知識・技術の習得・熟達と看護学生としての発達的变化：【コミュニケーションスキルの習得】、【授業で学んだ技術が身に付くことを実感する】、【実習における患者との関わりや患者を理解する重要性に気づく】、テーマ2. 看護補助アルバイトにおける看護や組織に対する肯定的体験：【看護補助業務の経験が自分の将来や実習につながることを実感する】、【看護師や看護補助者につながる喜びを感じる】、【働きやすさを感じる】、テーマ3. 看護補助アルバイトで感じる辛さや困難：【反面教師として看護師や看護補助者を見る】、【患者との関わりの中で抱く困難感】、【患者を援助することの体力的負担を感じる】、【看護補助者との関係の難しさを知る】の10の категорияが見出された。

これらの体験は、看護技術の習得や看護への価値づけなどキャリア形成への影響がある一方で、ジレンマや困難感もみとめられ、将来の職業選択に関する意思決定にまで影響する可能性があると考えられる。

〈Abstract〉

This study aimed to clarify what sort of experiences nursing students who worked part-time as nurses' aides did through the part-time work, by performing a group interview with 7 target students.

We identified 10 categories from their experiences: Theme 1. Acquisition and mastery of knowledge and skills concerning nursing and developmental changes as nursing students: "Acquisition of communication skills," "Feeling of mastering the skills learned in class," "Awareness of the importance of having a relationship with and understanding the patient in practical training," Theme 2. Positive experience for nursing and organization in nurse aide part-time work: "Feeling that the experience of working as nurses' aide relates to one's own future and practical training," "Feeling the pleasure of being related to nurses and nurses' aides," "Finding it easy to be working," Theme 3. Pain and difficulty felt at nurse aide part-time work: "Being able to observe and learn from unacceptable performance of nurses and nurses' aides," "Experiencing difficulties involved in interaction with the patient," "Appreciation of physical demands involved in assisting patients," "Understanding the difficulties of engaging with nurses' aides."

We observed that these experiences affected the students' formation of careers such as acquiring nursing skills and value for nursing, however because they also experienced dilemmas and difficulties, it is considered the potential to affect their decision-making regarding future job selection.

キーワード	
看護学生	nursing students
看護補助アルバイト	nurse aide part-time work
キャリア形成	career formation
質的研究	qualitative research

I. はじめに

近年、我が国の若者のコミュニケーション・対人関係能力や基本的マナーなど、職業人としての基本的な能力の低下が指摘されており、文部科学省は、「社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」が必要である¹⁾ことを発表した。それにより、現在、多くの大学でインターンシップや社会体験活動などのキャリア教育が取り入れられている。

看護学生の中にも、課外活動としてインターンシップやボランティアなど病院の中で行う活動に参加し、臨床現場で、実際の看護ケアを経験する学生がいる。インターンシップに参加した学生がとらえた視点として、「実習ではない視点からの看護の実際の理解」、「看護師として働くことの体感とイメージ化」、「就職・進路の決定に向けての参考になるアドバイス・視点を得る機会」等が報告されている²⁾。また、病院でのボランティア活動に関する看護学生の調査結果でも、「病棟とのかかわり」、「コミュニケーション」、「意識の向上」、「看護技術の実践」が今後の役に立つと感じている³⁾ことがあげられており、病院での活動が看護学生のキャリア形成に関連していることがうかがえる。

一方、わが国の大学生70.4%がアルバイトを行っており⁴⁾、関口はアルバイト業務において主体的に仕事に取り組むことが、彼らのキャリア学習やキャリア形成にとって重要な要素である⁵⁾と報告している。このようにアルバイトも社会的・職業的自立に向けた基盤となる能力や態度を育てることに影響していると考えられる。

保健医療分野においても、看護学生が病院でアルバイトとして雇用されており、その体験が看護学生のキャリア学習やキャリア形成に何らかの影響を及ぼすことが考えられる。デューイは教育と経験につ

いて、「個人が一つの状況で知識や技能を学んだことは、それに続く状況を理解し、それを効果的に処理する道具になる」⁶⁾と述べており、現在その人が学んだ内容は、将来において効果的に活用できることにつながるとしている。看護補助アルバイトにおいても、同様に、看護で活用できる何かを学んでいるのではないかと考える。すでに、病院でのボランティアやインターンシップにおける看護学生の体験についての報告はあるが、看護補助アルバイトに関する研究はされていない。そこで、本研究では、看護学生の看護補助アルバイトにおいて、学生はどのような体験をしているのかを明らかにすることを目的とし、それらの体験からキャリア形成への影響を考察することとした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究協力者

県内にある実習に関係している病院で看護補助アルバイトを6ヶ月以上行っている看護大学の学生で、研究の趣旨に同意が得られた学生7名。

3. データ収集方法と内容

1) 研究協力者の募集

大学内に、研究の趣旨と研究協力依頼のポスターを掲示して研究参加者を募った。応募した学生に対し研究者が文書を用いて研究の目的や協力内容、倫理的配慮等について説明をし、同意書への署名を得た。

2) インタビュー方法

インタビュー内容に関する研究協力者の負担を軽減するために、事前にインタビューガイドの内容を研究協力者に配布した。その後、半構造化面接法により、60～90分程度のグループインタビュー(2～3名/グループ)を行った。学生のプライバシー

保護とデータの信頼性の確保のために、インタビューは、研究者以外であり、アルバイト先病院に所属していない者とした。

〈インタビュー内容〉

- ・アルバイトをやって良かったまたは役に立っていると感じたこと／困ったことまたは困難と感じたこと
- ・アルバイトを続けられている理由
- ・アルバイトに対する意見・要望

4. 分析方法

インタビューによって得られたデータを逐語録として作成し、研究目的に関連する部分を選び出し、その内容の類似性や相違性を比較し、コードを作成してカテゴリー化して、帰納的分析を行った。分析の過程では、分類・解釈の妥当性を確保するために、研究者間で繰り返しデータを読み込み、事実の解釈に誤りや偏りが生じないように努めた。

5. 倫理的配慮

研究参加者には研究の趣旨と目的・方法を説明するとともに、研究参加は自由意思であり、参加しないことで不利益を被ることはなく、一旦同意した後で途中辞退しても、授業や実習成績への影響はないことを伝えた。また、研究に参加することで不快感や嫌悪感があった場合には、いつでも辞退できること、さらにインタビューの録音、プライバシーの保護、研究結果の公表について文書を用いて説明し、同意および署名を得た。

なお、本研究は亀田医療大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した (No.2015・A・004)。

6. 用語の定義

看護補助アルバイト：看護補助者とは、院内における医療スタッフの一員として看護職員の補助的業務を行う者⁷⁾であり、その業をアルバイトとして行うことをいう。

体験：中木らの定義する「身体性を備えた関係的存在である人間が不確かな状況で出会った印象に残る出来事とその時の心身の状態、特に限定された時期の身体的感覚と反応であり、結果として発達的变化、自己受容、肯定的感情、否定的感情、自己の存在意味の見出し、関係の再構築、修得・熟達を示す現象が見出されるもの」⁸⁾とした。

キャリア形成：厚生労働省職業能力開発局が述べる、キャリア（経験、経歴、発展）を前提として、個人が職業能力を作り上げていくこと、すなわち、関連した職務経験の連鎖を通して職業能力を形成していくこと⁹⁾とした。

Ⅲ. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者（以下学生）は7名で、内訳は2年生2名・3年生5名、男性2名・女性5名であった。

データ収集時の年齢は19歳～21歳、アルバイト経験は8ヶ月～1年6ヶ月であった。3年生は基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ（3週間）を修了し、2年生は基礎看護学実習Ⅰ（1週間）を修了しており、全員領域実習は開始前であった。また、勤務場所は、全員が病棟であった。

2. 看護大学生の看護補助アルバイトにおける体験

看護大学生の看護補助アルバイトにおける体験について、95のコードが抽出され、表1に示したとおり23のサブカテゴリー、10のカテゴリーが抽出された。さらにそれらのカテゴリーは、1. 看護に関する知識・技術の習得・熟達と看護学生としての発達的变化、2. 看護補助アルバイトにおける看護や組織に対する肯定的体験、3. 看護補助アルバイトで感じる辛さや困難の3つのテーマに集約された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈〉、学生の語りを「」で示した。

1) テーマ1：看護に関する知識・技術の習得・熟達と看護学生としての発達的变化

(1) 【コミュニケーションスキルの習得】

「年配の患者さんは堅苦しく話すと言が途切れてしまう」「30代の若い方は敬語を使ってきちんと話したほうが伝わる」というように、学生は様々な患者と話す機会を得、そこで〈患者との関わりを通してコミュニケーションスキルを学び〉、患者一人一人の特徴や反応から、コミュニケーションの手段を選択・活用しスキルを身につける体験をしていた。

このことは患者との関わりの中だけでなく、「看護師さんや医師から良いと思うものを聞き分け、真似て取り入れる」、「お年寄りにもきちんとした態度で敬語を使っている看護師さんがけっこういいと

表1 看護学生の看護補助アルバイトにおける体験

テーマ	カテゴリー	サブカテゴリー
1. 看護に関する知識・技術の習得・熟達と看護学生としての発達の变化	コミュニケーションスキルの習得	患者とのかかわりを通して、コミュニケーションスキルを学ぶ
		他の医療スタッフの話方から学ぶ
		患者と話すことに抵抗がなくなる
		コミュニケーションの楽しさを知る
	授業で学んだ技術が身に付くことを実感する	看護補助業務の経験から授業で学ぶ看護技術がイメージできる
		授業で習った看護技術を看護補助業務で活用できる
実習における患者との関わりや患者を理解することの重要性に気づく	患者目線を知る	
	看護補助者の仕事と看護の違いを知る	
	実習における患者理解の意味の深さがわかる	
	看護補助者の仕事を通して看護の仕事を考える	
2. 看護補助アルバイトにおける看護や組織に対する肯定的体験	看護補助業務の経験が自分の将来や実習につながることを実感する	看護を目指していることを実感する
		病院や病棟に対する抵抗がなくなった
	看護師や看護補助者につながることに喜びを感じる	物理的に馴染んでいたことが実習で役立った
		看護師や他の看護補助者から教えてもらえるうれしさを感じる
働きやすさを実感する	看護師や看護補助者の一員となれる	
3. 看護補助アルバイトにおける辛さや困難	看護の実際の場面にジレンマを感じる	
	患者との関わりの中で抱く困難感	患者の急変に対する恐怖
		暴力や大声の患者さんに対する戸惑い
		自己の看護行為に対する戸惑いや不安
		看護に対する迷い
	患者を援助することの体力的負担を感じる	トイレ介助の大変さ
患者を抑制することの難しさ		
看護補助者との関係の難しさを知る	看護補助者の間に挟まれて苦悩する	
	看護補助者の教え方の違いに関わる戸惑い	

思った」と、他の医療者と患者とのやり取り見てモデルとし、良いと思うものを真似することで自分の行動に取り入れ〈他の医療スタッフの話方から学ぶ〉ことになっていた。

また、「今まで身近な人としか話したことがなかったが、入院患者さんと話しているうちにどう接したらよいかわかりコミュニケーションが取れるようになった」、「患者さんと話すのにあまり緊張しなくなった」と語り、今まで見ず知らずの人と話す機会はあまりなかった学生は、患者との接し方をつかみ〈患者と話すことに抵抗がなくなる〉こと述べるようになっていた。また、「長くコミュニケーションが続くと楽しい」と、〈コミュニケーションの楽しさを知る〉ことにつながり、自分自身のコミュニケーション能力が変化していることを感じていた。

(2) 【授業で学んだ技術が身に付くことを実感する】

〈看護補助業務の経験から授業で学ぶ看護技術がイメージできる〉では、「授業でオムツ交換の技術を聞いた時イメージしやすく良かった」というように、学生は授業で教員からの講義を聞きながら、説明される技術のイメージ化が図りやすことを表出していた。また、逆に〈授業で習った看護技術を看護補助業務で活用できる〉ことに対し、「授業で説明だけだとよくわからなかったが、実際に経験することで感じがつかめた」、「繰り返しやるので、ベッドメイキングの仕方を忘れないでいられる」と、授業の中で学んだ技術を看護補助業務の中で繰り返し実践できることで、技術が確実に身についていくことを実感していた。

(3) 【実習における患者とのかかわりや患者を理解する重要性に気づく】

業務を行う中で、学生は「患者が看護師の忙しさがわかると話していたため、看護師の忙しい様子が患者に伝わっている」と〈患者視線を知る〉こととなり、患者がどのように看護師を見ているのか知り、患者との関わり方を考えることにつながっていた。

また、「看護補助業務では、その時のケアに入っている時のことしか考えないが、実習の場合は、1日中一人の患者に関わり、アセスメントし、そういうのって（違いが）大きい」、「実習では患者が長期間入院していて退屈な思いをしていることや家族のことも知ることができるため、患者に対する自分の考え方や思いが看護補助業務の時と違っていた」、「実習に行って、看護師がここまで患者さんのことを深く考えていたんだとわかった」と感じていた。このことは、患者の情報やそこからのアセスメントが重要であることに気づき、〈看護補助者の仕事と看護の違いを知る〉こととなっていた。さらに、看護補助業務を行っていたからこそ、看護実習において患者を理解することに努めていたことを認識し、〈実習における患者理解の意味の深さがわかる〉体験をしていた。同様に、「看護補助者は基本的に人に指示されて動くが、看護師は自分で考えて動くところが違うことに実習に出て気づいた」と語り、〈看護補助者の仕事を通して看護の仕事を考える〉機会となり、看護に対する自己の認識を深め、患者にどのようにかかわることが重要かを考え看護師としての発達的变化をたどっていた。

2) テーマ2：看護補助アルバイトにおける看護や組織に対する肯定的体験

【看護補助業務の経験が将来や実習につながることを実感する】

「(入学後に自分が) 何を目標しているのかわからなくなる時期があったが、(看護補助) アルバイトをすることで目指すものが明瞭になった」と語り、入学当初は、看護の専門科目以外の様々な授業を受ける中で、自分自身が何を目標して勉強しているのかわからない時期があったと語った。しかし、現場での仕事を通し、直接看護の仕事を目にすることで〈看護を目指していることを実感する〉ことにつな

がっていた。また、初期の看護実習では大変緊張して病院に入っていたが、看護補助アルバイトを通じ「実習に行った時に病院に入るのに緊張することがなかった」と〈病院や病棟に対する抵抗がなくなった〉ことを体験し、このことを肯定的にとらえていた。さらに、環境に馴染んでいくと同時に、病棟にある物品についても覚えることができ、〈物理的に馴染んでいたことが実習で役立った〉と語り、「物品の場所や物品の名前を覚えることができた」ことが、直接的に実習に役だったと実感していた。

【看護師や看護補助者とつながることに喜びを感じる】

看護補助業務を続けてこられたことについて、「看護補助者の人にわからないことを気軽に聞ける話易さが理由だと思う」、「看護師からケアの方法をアドバイスをもらえることが一番大きい」、「専門用語も気軽に教えてもらえる」と語っていた。このように〈看護師や他の看護補助者から教えてもらえるうれしさを感じる〉ことが、看護補助業務を続けるうえでのモチベーションにつながっていた。また、「人見知りで人と接することに抵抗があったが、バイトでは看護補助者や看護師からも話しかけてもらえて関係が築きやすかった」「(他の看護補助者から) バイトに行くとき来てくれてありがたうと言われると嬉しい」と述べ、慣れない業務の中で、先輩の看護補助者や看護師から声をかけられ、さらに自分が勤務に来ていることに感謝の気持ちを示された時、この組織での存在を認められ、〈看護師や看護補助者の一員となれる〉ことに喜びを感じていた。

【働きやすさを実感する】

また、雇用体制について「学生だから学業優先とすることが病院に理解され、休みたいときに休めるのがいい」と〈柔軟なシフトによる働きやすさ〉を感じていた。学生のアルバイトにおいて、病院の管理者は学業を優先するという認識のもとで雇用しているようであり、このことは働きやすさや組織体制を肯定的にとらえることにつながっていた。

3) テーマ3：看護補助アルバイトで感じる辛さや困難

【看護の実際の場面にジレンマを感じる】

一方で、否定的な感情も存在していた。学生は、「忙

しい病棟だから仕方がないと思うが、患者さんに接するときについ言葉が出ていた、[「ナースコールがひっきりなしになる時には、スタッフが患者のところに行けないのかもしれないのかと思ったりするが、本当はやってはいけないと思う」と実際の場面にジレンマを感じていた。多忙な業務の中、臨床現場で実際に起こっている看護師の態度に対し、仕方がない思いながらも患者さんのつらい思いを感じ取り、反面教師として感じていた。

【患者との関わりの中で抱く困難感】

看護補助業務の中で、「患者さんが急変すると（どうしてよいか）全然わからないから怖くなった」と、初めて患者の急変に出会い、経験のない学生は〈患者の急変に対する恐怖〉を感じていた。同様に患者と関わる中で、〈暴力や大声の患者さんに対する戸惑い〉を感じており、「暴力を振るったことのある患者だから気をつけてと言われると怖いし、嫌だと思った」、[「大声を出す患者にあたって、すごく怖くてその人のケアに入るときは嫌だと思った」]など、暴力や暴言の可能性のある患者に接することに恐怖を感じていた。

また、業務を行っていく中で、「協力が得られない患者へのケアを行わないといけない状況のときには、自分がひどい看護師になるのではないかと心配になる」と語った。協力を得られない患者に対し、無理に援助行為を行った自分自身に、「もっと優しくしてあげられたらと思うが、他の看護補助者もしている」ことを同じようにせざるを得ない状況で、〈自己の看護行為に対する戸惑いや不安〉を感じていた。

そして、患者に対する恐怖を感じた学生はそのことを看護師に相談していた。そして、「その看護師も患者が怖いと言うが普通に関わっているのを見て、自分はどうしようかと思う」と関わりをもてない自分自身の将来を考えて、〈看護に対する迷い〉を感じていた。

【患者を援助することの体力的負担を感じる】

患者を援助する中で、「車椅子の患者のトイレ介助を支えるのがしんどい」と〈トイレ介助の大変さ〉や、「認知症のすごく力の強い暴れる患者の対応には肉体的に疲れる」と〈患者を抑制することの難し

さ〉を感じていた。このように、患者を援助することの体力的負担についての困難感を語っていた。

【看護補助者との関係の難しさを知る】

それ以外に看護補助者間での人間関係でも難しさを感じていた。「看護補助者の力関係もあって誰についたら良いか、AさんとBさんに同時に仕事を頼まれて、どちらの方を先にやった方がいかと迷った」という〈看護補助者の間に挟まれて苦悩する〉状況があった。また、「掃除のやり方を誰に教わったのかと他の看護補助者に言われて困った」と業務の方法の違いについて指摘され、〈看護補助者の考え方の違いに関わる戸惑い〉もあり、看護補助者との関係の難しさを体験していた。

IV. 考察

1. 看護補助アルバイトの体験とキャリア形成への影響

学生らは、看護補助アルバイトにおいて、コミュニケーションスキルの習得、授業で学んだ技術が身に付くこと、実習における患者との関わりや患者を理解することの重要性に気づいていた。

看護学生のコミュニケーションについて、Catherineは、看護師のロールモデルや難しい患者との会話が看護学生のコミュニケーション発達プロセスにおいて重要なステップであり、臨床の中でそれを学ぶ¹⁰⁾と述べている。今まで身近な人以外と会話する経験が乏しい学生は、臨床に身を置き他の医療職と患者との会話をロールモデルとしていた。ロールモデルは、学生が看護師として専門的態度を修得するために有効であり、その学習効果には持続性がある¹¹⁾といわれており、この体験がコミュニケーションスキル習得に有効な体験になっていたと考えられる。

さらに、学生は、繰り返し看護技術を実施できたことで、技術が身に付くことを実感している。本来、質の高い看護を提供できる人材育成のためには、看護基礎教育の中で、患者を対象とした技術が十分に習得できることを目指すことが必要であろう。しかし、谷口らは、看護大学の実習状況について、学生が学んだことを実践しようとするが、臨床では看護学生ということでケアを制限される場合もあり、看

護学生の自分を活かす場が臨床現場にないこと¹²⁾を報告している。このように、学んだことを実践する最たる場である臨床実習でその経験ができない現状があるならば、看護補助アルバイトは看護技術習得のための機会になると考えられる。これまでに小林らのボランティア活動をする看護学生の調査で、「コミュニケーション」、「看護技術の実践」が今後役に立つ³⁾と報告されていた。しかし、看護補助アルバイトでの報告はなく、看護補助アルバイトにおいても学生たちがコミュニケーション能力や看護技術を習得していたことが明らかになり、キャリア形成に影響する学習をしていたといえる。

また、看護補助業務の中では、看護実習のように患者の情報について十分に把握することができずに業務を担っていた。そのため、看護実習と比較し、看護における患者との関わりや患者理解の重要性に気づいている。さらに、患者や看護職員との関係から看護師としての態度や看護の価値を見出していた。このことは、看護を学ぶ中で、自己の看護職へのアイデンティティを確立しつつ、看護における重要な部分について価値づけ、自分自身の中で統合しており、看護師としての発達的变化がみられていると考えられる。杉森は、臨地実習は、一般社会における看護の価値づけを再吟味して、専門職としての看護を再評価し、価値づけるきっかけとなる¹³⁾と述べている。看護補助業務を行い、看護とは違う立場から患者と関わることが、専門職として看護を価値づけるきっかけになったと考えられる。また、デューイは現在その人が学んだ内容は、将来において効果的に活用できることにつながる⁶⁾ことや現在の経験の十分な意味を引き出すことによって未来の準備をする¹⁴⁾と述べている。看護補助アルバイトの体験からの意味を見出し、自己の将来の看護に対する準備を行っていたといえる。

今回の結果から、コミュニケーションや対人関係能力の未熟さが指摘されている現代の若者にとって、看護補助アルバイトは、その基本的な力を身につけ、自己のアイデンティティの確立にもつながる体験になっていると考えられた。特に、他のアルバイトと違い、看護補助業務は患者を対象として安全で快適な環境を提供する職業である。このことは、

看護師を目指すものとしての基本的な能力とともに看護師としての責任を学ぶ機会となると考えられる。関口が述べるようにアルバイト業務において主体的に仕事に取り組むことが、キャリア学習やキャリア形成にとって重要な要素である⁵⁾とあり、今回の結果からも看護補助アルバイトが看護師としての社会的基盤となる能力を育て、キャリア形成に影響していることが分かった。また、実習に関係している施設であったことから、実習に役立つ体験につながっていた。実際、実習に対する緊張や患者・スタッフとのコミュニケーションに課題を感じている学生は多い。今回の体験から看護補助アルバイトを行うことで施設を知ることができ、またコミュニケーションスキルが身につくことなどを看護教育に携わる教員や臨床看護師、そして学生に伝え、その選択ができる体制を整えていくことが必要であると考える。

一方で、看護補助アルバイトを行う中、看護師や看護補助者の患者に関わる姿勢を見て、自分の考えていた看護とのギャップにジレンマを感じていた。また、自分自身が医療事故を起こすのではないかという恐怖や対応の難しい患者への関わり、看護補助者との関係の中で困難を感じており、これらは看護に対する迷いにもつながっていた。舟島の述べる看護学生の同一性の形成にかかわる4つの体験の一つに「意思決定への試行錯誤」がある。これは、専門的な学習活動において、開始以前に抱いていた理想とは大きなギャップがあることが徐々に見え、自分がその職業に向いているのかといった疑問がわくこと¹⁵⁾であると述べている。看護補助業務は実習と違い学習活動とはいえないかもしれないが、その業務の中で自分自身が選択した将来の職業に対する理想とのギャップを感じ、自分がその職業に向いているのかといった疑問を抱くことに関しては、同様の体験をしていたといえる。このような体験は、アルバイトの継続だけではなく、将来の意思決定にまで影響を及ぼす可能性があるといえる。

2. 看護補助アルバイトに関する今後の課題

現在、全国的にも人材不足の病院は少なくない。そのため、学生アルバイトは病院にとって貴重な労働力であり、学生にとっても看護に必要な技術や知

識の習得、看護への価値づけ、キャリア形成につながるなど有益な面があると考えられる。学生は、看護補助業務を継続している中で、看護師や他の看護補助者とつながる喜びを感じ、そのことに働きやすさを実感していた。ベナーは、新人看護師の支援環境について、コミュニティにうまく統合していくことが臨床的知識の発達と社会的支援の鍵となる¹⁶⁾と述べている。今回の学生たちの〈看護師や他の看護補助者から教えてもらえるうれしさ〉、〈看護師や看護補助者の一員となれる〉という体験は、自らが属する環境に適応していくとともに、そこが学習と成長につながる環境であったと考えることができる。そして、このような環境を継続して整えることが、看護補助アルバイトの持続に必要であるといえる。

一方で、否定的感情として認められた看護の実際の場面で感じたジレンマや患者との関わりの中で抱く困難感、将来の職業選択に関する意思決定にまで影響する可能性が考えられた。現実的に様々な体験を通し、学生たちは将来看護師になる自分自身について確信を持つ場合や、揺らぎを感じる場合があるだろう。しかし、その中で、看護師になることを諦めてしまうことや、学習意欲の低下につながるものが懸念される。そのためには、看護補助業務を行う学生に対し、雇用側である臨床の管理者や大学側で、学生が相談しやすい環境を整えとともに、サポート体制を明確にし、学生に明示するなど、継続した支援の確立が必要であると考えられる。

今回、看護補助アルバイトの体験やキャリア形成に対する影響は、6ヶ月以上継続してアルバイトを経験した学生を対象としており、短期で辞めてしまった学生の体験は含まれていない。そのため、看護補助業務を行う学生への理解を深めるためには、さらに対象の学生を広げていく必要があると考えられる。

V. 結論

看護補助業務を行う学生の体験から、テーマ1. 看護に関する知識・技術の習得と看護学生としての発達の变化として、【コミュニケーションスキルの習得】、【授業で学んだ技術が身に付くことを実感す

る】、【実習における患者との関わりや患者を理解する重要性に気づく】、テーマ2. 看護補助アルバイトにおける看護や組織に対する肯定的体験、【看護補助業務の経験が将来や実習につながることを実感する】、【看護師や看護補助者につながる喜びを感じる】、【働きやすさを感じる】、テーマ3. 看護補助アルバイトにおける辛さや困難として、【看護の実際場面にジレンマを感じる】、【患者との関わりの中で抱く困難感】、【患者を援助することの体力的負担を感じる】、【看護補助者との関係の難しさを知る】が見出された。

看護補助アルバイトの体験は、看護に必要な技術の習得や、看護への価値づけなどがみとめられ、キャリア形成に向けてプラスの面がある一方で、看護の実際の場面で感じたジレンマや患者との関わりの中で抱く困難感は将来の職業選択に関する意思決定にまで影響する可能性があると考えられる。

文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について、
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2010/06/01/1293956_1_1.pdf, (検索日：2016.9.22)
- 2) 坪井桂子, 布原佳奈, 大川眞智子, 他：就職進路支援としての大学と病院の共同による就職体験研修の試み, 岐阜県立看護大学紀要, 8(2)：19-28, 2008
- 3) 小林万里子, 西野理英, 岩崎寿賀子, 他：看護学生による病棟でのボランティア活動報告, 聖路加看護大学紀要, 35：45-51, 2009
- 4) 全国大学生生活協同組合連合会：第51回学生生活実態調査の概要報告,
<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>, (検索日：2016.9.22)
- 5) 関口倫紀：大学生のアルバイト経験とキャリア形成, 日本労働研究雑誌, 602：67-85, 2010
- 6) ジョン・デューイ, 市村尚久(訳)：経験と教育, 65, 講談社学術文庫, 東京, 2004

- 7) 日本看護協会：看護補助者活用推進のための看護管理者研修テキスト, <https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/fukyukeihatsu/kangohojyosha-text.pdf>, (検索日：2016. 9. 16)
- 8) 中木高夫, 谷津裕子, 神谷桂：看護研究論文における「体験」「経験」「生活」の概念分析, 日本赤十字看護大学紀要, 21 : 42-54, 2007
- 9) 厚生労働所職業能力開発局：「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/07/h0731-3a.html>, (検索日：2018.2.3)
- 10) Catherine Nuss Kotecki : Baccalaureate Nursing Students' Communication Process in the Clinical Setting, *Journal of Nursing Education*, 41 (2) : 61-68, 2002
- 11) 杉森みど里, 舟島なをみ：看護教育学第6版, 266, 医学書院, 東京, 2016
- 12) 谷口初美, 山田美恵子, 内藤知佐子, 他：大卒新人看護師のリアリティ・ショックースムーズな移行を促す新たな教育方法の示唆一, *日本看護研究学会雑誌*, 37(2), 2014, 71-79
- 13) 杉森みど里：看護教育学第3版, 241, 医学書院, 東京, 1999
- 14) 前掲6), 75
- 15) 前掲11), 175
- 16) Benner, Patricia E. Tanner, Christine A., Chesla, Catherine A. 早野真佐子 (訳) : ベナー看護実践における専門性 達人になるための思考と行動, 77, 医学書院, 東京, 2015